

結果オーライ

藤田明子

「あと30年かあ。どうやって生きていけばええん」

「えっ。明ちゃん、もう30年も生きるつもりなん」

古希を目前にして同級生とランチを楽しんでいる中での会話である。

人生は80年から100年時代に突入した。これからは生き方や「資産寿命」が問われていく。そんな中で、70歳からの過ごし方を頭の中に描こうとしていた私は、一瞬、たじろいでしまった。

この6月、長かった務めを終えた。約50年近く、組織の中でそれなりに「仕事人間」として過ごしてきた。これからは拘束された時間配分もなく、自分自身で勝手気ままにスケジュールを決めてよいと、ぜいたくな権利をもらった。心ときめかずにはいられない。

それでも、不安は少なからずある。予想外の出来事は、心に留めておかなければならないと感じていた。

なぜなら、今まで何年間も健康診断・血液検査で全て異常なしの私。それが、ある日突然、「白内障の手術はいつしてもいいですよ」と言われ、認知症はどうかとMRIをとったところ、「年相応です」と。

その後の一言が厳しかった。「大変なものが見つかりました。脳動脈瘤があります。小さいですが、雪だるまのような二段式なので、なるべく早めの手術をお勧めします」

来た！来た。知りたくなかった現実。それは私の輝く未来30年を、

無残にも崩していく瞬間でもあった。

そういえば最近、毎年のように骨折も繰り返している。落ち着いた行動の欠落か。年齢以上の行動をしているためか。脳動脈瘤のせいか。

まだ欲張って、海外旅行にも行きたいし、いま10歳の孫が20歳になったら彼が誕生の年に漬けた梅酒と一緒に飲む約束もある。

この状況の中、空中分解しそうな頭を精一杯使い、なんだかんだと思いを馳せてみた。脳動脈瘤は破裂すると、くも膜下出血を起す。しかし破裂率は年間1パーセントとか。

そして、私は悟ったのである。それは、拘束時間から解放され、自由時間の中で、気ままなエネルギーが沸いてくる瞬間でもあった。

心落ち着けて深呼吸した。勇気がむくむくと湧いて来た。その結果、残りの人生は、悩むことなく自分の歩調で、成り行き任せ、運任せの風に乗って、結果オーライがベストの選択だと気づいたのだ。

見上げると、平成から令和に移った夏空は、何事もなかったかのように晴れわたって、ゆったりと時を刻んでいる。

作者 藤田明子

題名 結果オーライ

産油新聞夕刊

2019.08.15 掲載